

中丹のまなび 13

～豊かに学び続け 未来を拓く力をはぐくむ中丹の教育～

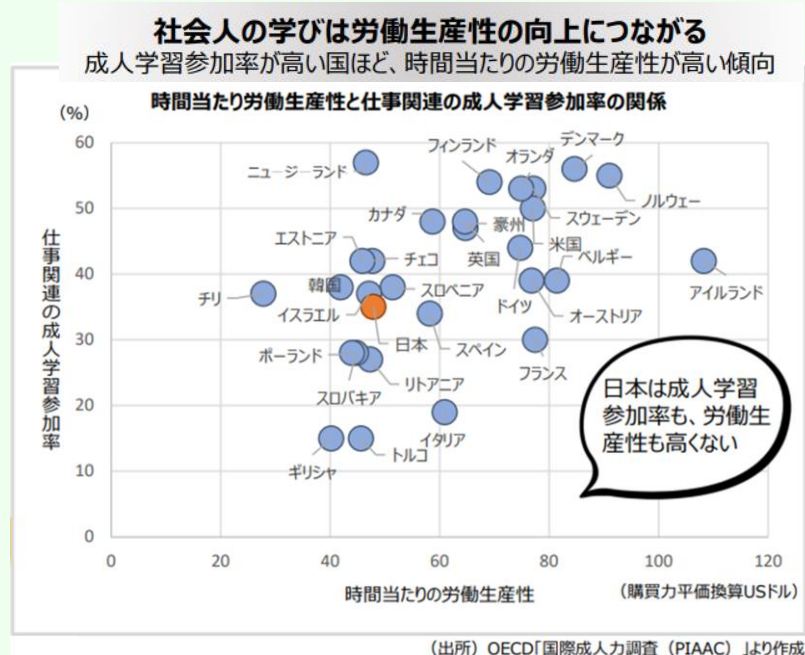
CONTENTS

- ◆ 生涯にわたる「主体的な学び手」をはぐくむために～学校段階等間の接続の重要性を認識して～
 - ◆ 全ての児童生徒の成長を促す生徒指導を目指して～生徒指導提要改訂のポイント～
 - ◆ わくわくする学び 実践事例1
子どもたちが主体的に考え、本音で語り合う～児童生徒と一緒に創る道徳の授業を目指して～
 - ◆ わくわくする学び 実践事例2
PBLの手法を生かした授業改善～単元構想シートを活用して、育成を目指す資質・能力を意識する～
 - ◆ 指導と評価の一体化を図り、育成すべき資質・能力をはぐくむ
-

生涯にわたる「主体的な学び手」をはぐくむために

生涯にわたって学び続ける社会へ

「教育未来創造会議」第1次提言によると、これからの社会像として国際競争力が低下し我が国の生産年齢人口はさらに減少する中、我が国の未来を支える人材育成は急務とされています。そんな中、このような未来を支える人材像として、「好きなことを追究して高い専門性や技術力を身に付け、自分自身で課題を設定して考えを深く掘り下げられる人材」「多様な人とコミュニケーションをとりながら、新たな価値やビジョンを創造し、社会課題の解決を図っていく人材」が掲げられています。また、議論の中で「特に初等教育で一番大事なことは、自分の好きなものをとことん地球の裏側まで掘ること。自分の個性を尊重する教育から始めなければならない。」という提言もなされています。



目指すところに向かい、 全教職員がリーダーシップを発揮し、組織を着実に前に進める

【京都府の目指す人間像】
めまぐるしく変化していく社会において、変化を前向きにとらえて主体的に行動し、
よりよい社会と幸福な人生を創り出せる人

これは、京都府の教育の基本理念として掲げられている「目指す人間像」です。「目指す人間像」ですから、児童生徒のみならず、私たち大人もこのような人間像を目指します。一人一人の教職員が、自分事としてこの方向性を認識し、主体的に学び続けることが大変重要です。一人一人の教職員が同じ方向を目指すことにより、学校全体としても大きな推進力が生まれます。

【中丹教育局コンセプト】
豊かに学び続け 未来を拓く力をはぐくむ中丹の教育

「人生100年時代、主体的に楽しんで学び、目標に向かって粘り強く努力し、新しい時代を創造するような人に育ってほしい」という願いを込めて、この度、新たなコンセプトの下で中丹の教育を推進します。

令和5年度京都府中丹教育局学校教育取組の重点は、魅力ある学校づくりです。それを「課題解決型の学習の推進」と、「不登校の未然防止と適切な対応」を両輪として推進します。中丹地域の園・小・中・高等学校がひとつとなって取組を推進することで、きっと大きな力が生み出せるはずです。そのために教職員一人一人が主体的に動くこと、全教職員がリーダーシップを発揮することが求められます。子どもたちの幸せのため、教職員の幸せのため、「子どもを育てる学校」から「子どもが育つ学校」へとチーム学校としての推進体制を構築しましょう。

～学校段階等間の接続の重要性を認識して～

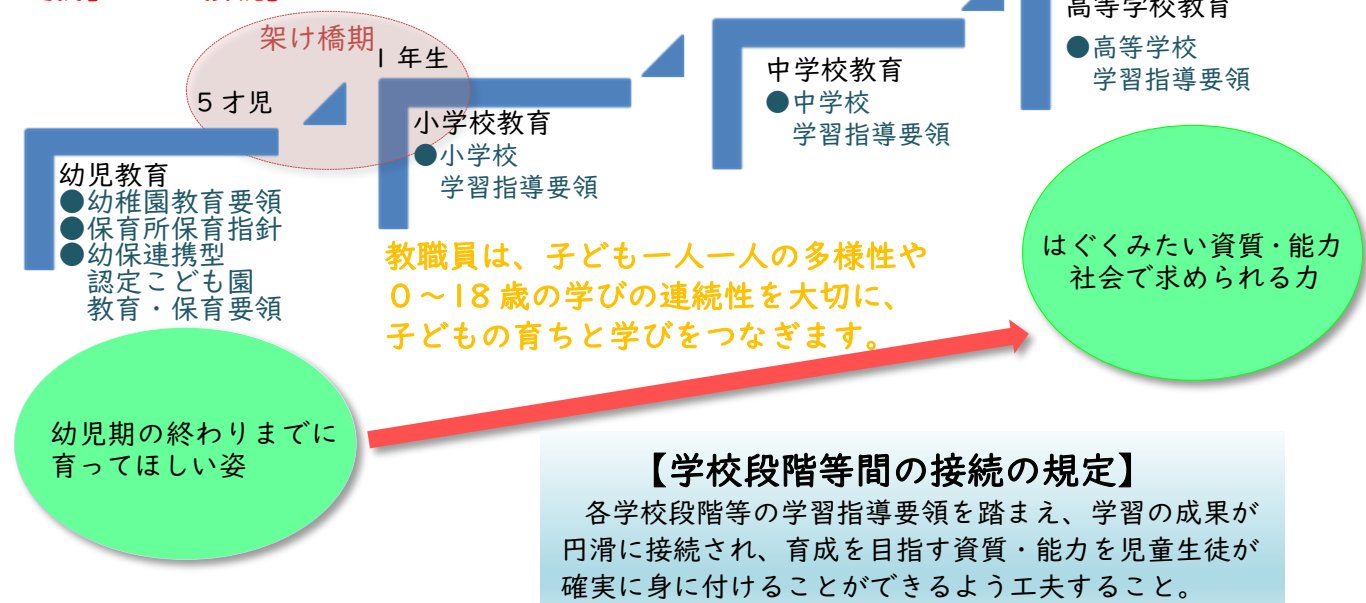
「わくわくする学び」を経験し、「学びに向かう力」をはぐくむ

今回の学習指導要領の改訂においては、幼児教育・小学校教育・中学校教育・高等学校教育の連続性が育てたい資質・能力の育ちにおいて整理されました。その枠組みが、「知識及び技能」「思考力、表現力、判断力等」「学びに向かう力、人間性等」です。幼児期には自発的な遊びを通してその資質・能力をはぐくみ、それを基盤として小学校以降では教科等の学びを通して基礎の育成を図り、小学校、中学校、高等学校の発達段階に応じて資質・能力を系統的に育成していくことになります。そのためには、各園校種の教育内容を相互理解し、その上で各段階で身に付けさせたい資質・能力をはぐくむことが大切です。

この学校段階等間の接続にあたっては、「子どもは生まれながらに学ぶ意欲と学ぶ力をもった有能な学び手であること」「子どもが進学に合わせて準備をするのではなく、学校が子どもに合わせて準備をすること」が大前提となります。このように生涯にわたって学び続ける資質・能力をはぐくむ「わくわくする学び」とは、どのような学びでしょうか。このあとの実践事例等で詳しく紹介します。

また、「学びに向かう力」についても児童生徒の非認知能力の変容を見取り、児童生徒の自己調整や教師の指導改善に生かす「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」がいよいよ令和5年度からスタートします。

●「連携」から「接続」へ



「社会の変化に対応する」とともに 「自分たちの社会は自分たちで創る」という意識の醸成を

めまぐるしく変化する社会において、私たちにはその変化に対応し、主体的・協働的に課題を解決し、よりよい社会を創造する力が求められています。新たな価値を創造し、共に幸せに生きる社会の担い手となること。そのためには、「自分たちの社会は自分たちで創る」という当事者意識を持った社会人の育成が非常に大切です。この力は、初等中等教育段階から育成しなければ、社会に出た時にすぐに身に付くものではありません。

令和4年12月に生徒指導提要が12年ぶりに改訂されました。その基盤となる考え方は「発達支持的生徒指導」です。あくまでも、児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくことが尊重され、その発達の過程を学校や教職員がいかに支えていくかという視点に立っています。このことから学校の存在意義や教職員の役割とは何かを改めて問い直す必要があります。学校は社会の縮図です。「自分たちの学校は自分たちで創る」という意識のもと、例えば学級や学校のきまりを児童生徒が自分事としてその意味を理解し、自主的に守ったり見直しを図ったりすることが求められています。

生涯にわたる主体的な学び手をはぐくむために、教職員も主体的に学び続けましょう。

全ての児童生徒の成長を促す生徒指導を目指して

生徒指導提要とは

「生徒指導提要」とは、小学校段階から高等学校段階までの生徒指導の理論・考え方や実際の指導方法等について、時代の変化に即して網羅的にまとめた**生徒指導に関する基本書**です。生徒指導の基本的な考え方や取組の方向性等を再整理するとともに、今日的な課題に対応していくため、**令和4年12月に改訂**されました。

近年、いじめの重大事態や暴力行為の発生件数、不登校児童生徒数、児童生徒の自殺者数が増加傾向であるなど、生徒指導の課題はますます深刻化しています。

また、「いじめ防止対策推進法」（平成25年）や「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（平成28年）のようないじめや不登校をめぐる法令が成立した経緯もあり、平成22年版提要の作成時から生徒指導をめぐる状況は大きく変化しています。

改訂の基本的な方向性は次の3点です

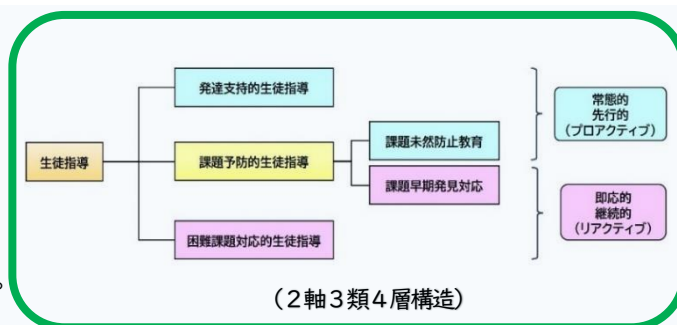
- 児童生徒の問題行動等の発生を未然に防ぐための「積極的な生徒指導」の充実**
「成長を促す指導」等の「積極的な生徒指導」を充実
- 個別の重要課題を取り巻く関連法規等の変化の反映**
社会環境の変化（法制度、児童生徒を取り巻く環境等）やそれらに応じた必要な対応等について反映
- 学習指導要領やチーム学校等の考え方の反映**
全体を通して児童生徒の発達支援、チーム学校、学校における働き方改革、多様な背景（障害や健康、家庭的背景等）を持つ児童生徒への生徒指導等について反映

生徒指導の構造は2軸3類4層構造

生徒指導提要（p.17）より

2軸は児童生徒の課題への対応を時間軸に着目すると、「**常態的・先行的（プロアクティブ）生徒指導**」と、「**即応的・継続的（リアクティブ）生徒指導**」に2分されます。

3類は生徒指導の課題性（「高い」「低い」と課題への対応の種類から分類すると、「**発達支持的生徒指導**」、「**課題予防的生徒指導**」、「**困難課題対応的生徒指導**」になります。



4層は生徒指導の重層的支援構造について

全ての児童生徒を対象とした

第1層「発達支持的生徒指導」と

第2層「課題予防的生徒指導：課題未然防止教育」
一部の児童生徒を対象とした

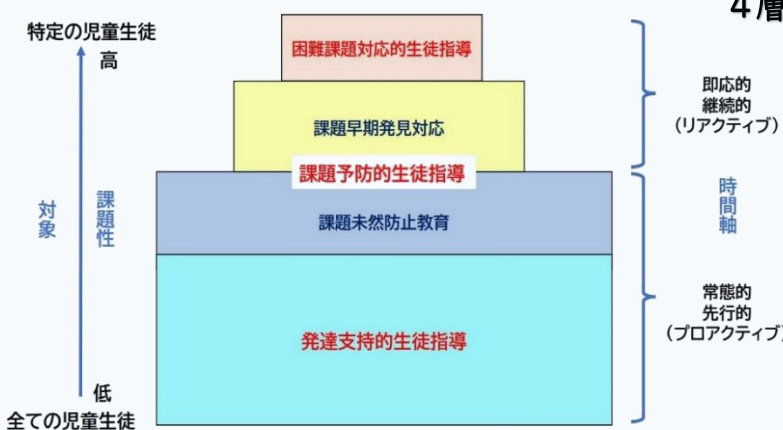
第3層「課題予防的生徒指導：課題早期発見対応」

そして、特定の生徒を対象とした

第4層「困難課題対応的生徒指導」

から成っています。

左図をしっかりとイメージして、生徒指導の構造について理解指導することが大切です。



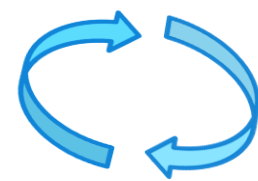
図：生徒指導の重層的支援構造

～生徒指導提要改訂のポイント～

今回の改訂で大切にされている発達支持的生徒指導とは

特定の課題を意識することなく、全ての児童生徒を対象に、学校の教育目標の実現に向けて、教育課程内外の**全ての教育活動において進められる生徒指導の基盤**となるものです。

発達支持的とは、児童生徒に向き合う際の基本的な立ち位置を示しています。すなわち、あくまでも**児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくことが尊重され、その発達の過程を学校や教職員がいかに支えていくかという視点に立っています。すなわち、教職員は、児童生徒の「個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」ように働きかけます。**



発達支持的生徒指導と
課題予防的生徒指導や困難課題対応的生徒指導は
円環的な関係



発達支持的生徒指導や課題予防的生徒指導（課題未然防止教育）の在り方を改善していくことが、生徒指導上の諸課題の未然防止や再発防止につながり、課題早期発見対応や困難課題対応的生徒指導を広い視点から捉え直すことが、発達支持的生徒指導につながるという円環的な関係にあります。

これからの生徒指導においては、特に常態的・先行的（プロアクティブ）な生徒指導の工夫が一層必要になります。

令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果から、不登校児童生徒数は京都府においても増加傾向となっています。学校・本人・家族に関わる様々な要因が複雑に関わっている場合や、学校に対する保護者・児童生徒自身の意識の変化があると分析しています。コロナ禍で、交友関係の構築や生活リズムの乱れ、生活の制限による本人・保護者のストレスなどがかわり、登校への意欲が湧きにくい状況が加速したと分析しています。中丹でも、このような京都府の分析を生かしながら、不登校対策につながる発達支持的生徒指導を意識した取組を進めていく必要があります。

中丹の大きな課題の1つに不登校があります。今回の生徒指導提要では、不登校支援につながる発達支持的生徒指導として、次のように書かれています。

不登校対策につながる発達支持的生徒指導

生徒指導提要（p.229）より

魅力ある学校づくり・学級づくり

全ての児童生徒にとって、学校や学級が安全・安心な居場所となる取組を行うことが重要です。「**自分という存在が大事にされている」「心の居場所になっている」「学校が自分にとって大切な意味のある場になっている」と実感できる学級づくりを目指すことが求められます**。

特に、入学直後や学級編成替え後の時期は、人間関係を一から構築する大切な節目です。学級担任は、日々の授業や特別活動を通し、全ての児童生徒にとって、個々の学びを保障する分かりやすい授業を工夫し、学級が安心して楽しく過ごせる雰囲気になるような居場所づくり・集団づくりを進めることが求められます。

また、校長のリーダーシップの下、いじめや暴力行為などを許さない学校運営や学級づくりを行うことは、様々な問題の芽を摘み、全ての児童生徒にとって安全・安心な学校を実現する一歩となります。

学習状況等に応じた指導と配慮

不登校の原因として、学業の不振がその一つとなっている場合があります。授業において、児童生徒一人一人の学習状況等を把握した上での「指導の個別化」や児童生徒の興味・関心に応じた「学習の個性化」を目指して、個別最適な学びを実現できるような指導の工夫をすることが大切です。「**どの児童生徒も分かる授業**」、「**どの児童生徒にとっても面白い授業**」を心がけることで、**全ての児童生徒が学業への意欲を高めたり、学級での自己存在感を児童生徒が実感したりすることが可能になります**。

そのためには、児童生徒が学習内容を確実に身に付けることができるように、「個別指導やグループ別指導」「学習内容の習熟の程度に応じた指導」「児童生徒の興味・関心等に応じた課題学習」「補充的な学習や発展的な学習」などの学習活動を取り入れた指導など、指導方法や指導体制を工夫・改善し、個に応じた学習指導の充実を図ることが求められます。

積極的生徒指導の充実、個別の重要課題を取り巻く関連法規の変化、学習指導要領やチーム学校の考え方といった基本的な方向性を踏まえ、全ての児童生徒に対して、学校が安心して楽しく通える魅力ある環境となるよう、生徒指導の一層の充実を図っていくことが大切です。

わくわくする学び
実践事例 1

子どもたちが主体的に考え、本音で語り合う

～ 児童生徒と一緒に創る道徳の授業を目指して ～

生涯にわたって学び続ける資質・能力をはぐくむ「わくわくする学び」について、道徳の授業を紹介します。
小学校では平成30年度、中学校では平成31年度から教科化し、「**特別の教科 道徳（以下道徳科）**」としてスタートしました。児童生徒が、自らの人生や社会における答えが定まっていない問いを受け止め、多様な他者と議論を重ねて探究し、「納得解」を得るための資質・能力を育成すべく、「**考え、議論する道徳**」への授業改善を推進します。

道徳科の授業の中で意識してほしいことは、以下の3点です。

ねらいとする
道徳的価値の
理解を基に

- ☆児童生徒が、問題意識をもって、**自分との関わり**で捉えて考えている。
- ☆児童生徒が、ものごとを**多面的・多角的**に考えている。
- ☆児童生徒が、**自己の（人間としての）生き方**について考えを深めている。

授業の中で、このような児童生徒の姿が見られますか。

～授業構想～ 授業者が指導の意図を明確にし、ねらいとする道徳的価値、児童生徒の実態、教材をもとに主題を設定、基本的な学習指導過程（導入・展開・終末）を組み、指導方法を工夫します。



導入

主題に対する児童生徒の興味や関心を高め、ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめる動機付けを図る段階

展開

ねらいを達成するための中心となる段階であり、中心的な教材によって、児童生徒一人一人が、ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめる段階

終末

ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えを整理したり、道徳的価値を実現することの良さや難しさなどを確認したりして、今後の発展につなぐ段階

授業の中で子どもたちが「考える」必要性を感じられる「**わくわくする学び**」を。

小・中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳より

ここからは授業づくりの工夫について、**P21 道徳科授業力向上プロジェクト**の研究実践を参考にお伝えします。小学校の実践ですが、中学校でも参考にしてほしいポイントを示しています。

小学校2年生 ○主題:ひとりひとりをたいせつに ○内容項目:C-11 公正・公平・社会正義

【児童の実態】 児童は、友達と関わるのが好きで学級の仲間と分け隔てなく話したり遊んだりできるが、自己中心的な行動も多く見られる。

【指導のねらい】 本教材の主人公を通して、自分自身を振り返り、誰にでも公平・公正に接することの大切さやその良さについて気付かせる。そして、どんな場面でも、一人一人を大切にしていこうという意欲を育てる。

教材:のこぎり山の大ぶつ 学校の遠足で山登りがある。班決めて歩くのが苦手な「あかり」と一緒になった主人公の「こうだい」は、心配になる。遠足当日、こうだいの班は、他の班より少しずつ遅れてしまう。こうだいは、あかりさんに「おそいよ。はやく歩いてよ。みんなから遅れてしまうよ。」とつい言ってしまう。息があがり、苦しそうにしているあかりさんをみんなが心配する。それを見たこうだいは、はっとする。こうだいは自分を振り返り、あかりさんに「ごめんね。急がせて。ぼくもゆっくり歩かね。」と声をかけ、荷物を持って登り始める。大仏の所に辿り着くと、こうだいはあかりさんからお礼を受ける。はっとして見上げた大仏は、なんだか笑っているように見えた。

本時の主題に関わる問題意識を持たせる導入の工夫

○はんのメンバーをきめています。この中から、あと一人だれと行きたいですか。

山のはりをします。先生が先頭をあるきます。はんのみんなで まとまっのぼりましょう。

Aさん わたしは、あるくのがにがてです。がんばりやさんですが、きっと、おくれてしまいます。

Bさん わたしは、てきぱき こうどうすることができます。山のはりも とくいです。

Cさん わたしは、お話じょうずです。みんなを たのしませることができるとおもいます。

先生

上記の質問に児童の反応は様々だった。終末に同じような問いかけをすることで、児童が自己の変容を振り返ることができる。

導入

○すてきなと思うところはどこですか？ 黒板の写真にハートを貼りましょう。

すてきなところ:ピンクハート
すてきではないところ:ブルーハート

後半

前半

教材範読後、全員の意思表示を見える化する。

他と対話し、共感や比較する等、**色々な感じ方**があることに気付く。

板書の工夫:心の可視化

見えない心を可視化することで、子どもたち自身が、自分の考えは全体のどこに位置付くのか、友達の考えと同じか違うのか、どこが違うのか気付いたり、板書等を通して、自身の考えを深めたり、自己を振り返る時間を持つことができる。

主人公の前半と後半で、ハートの色から違いが見える。「なぜハートの色が変わったか」考えさせたい。また、最後の場面にもハートが貼られ、**新たな気付き**が見られる。

◎中心発問:どうしてこうだいさんは、あかりさんの荷物をもってゆっくり歩くことにしたのですか。

発問の工夫:ねらいに迫る発問

○あかりさんだけ荷物を持ってあげるのは不公平かな。

子どもたちの考えを深めるために、また、考えてほしいことを焦点化するためには、教師の意図的な発問は重要である。

自分の体験を想起させる工夫 ○あかりさんと一緒に登ってきたぼくは、大仏にどんなことを言っただいしょうか。

自分の体験や経験と結び付けて考えることで、今後への思いや課題について、「どうなりたい」や「どうしていこう」等、考えを広げる時間を作ることができる。

主人公(ぼく)の行動を通して、(児童自身も)良いことをした後の清々しさや心の充足感を疑似的に味わうことで、誰に対しても公正・公平に接することの良さに気付かせる。

終末

振り返りシートでは、本時での学びや気付きを書かせた。その中で、「僕も町探検の班のメンバーで心配な子や大丈夫な子がいたが、相手に合わせて行動した。」と、自身の体験を振り返り書いている様子や助け合うことの大切さを書いていた。授業の中では、教師が想定していない児童の反応がいくつかあったが、**子どもの言葉を否定せず受け止める姿勢や児童の理解度に応じた発問**を事前に準備していたこともあり、児童がねらいとする道徳的価値について一生懸命に考える姿が見られた。

子どもたちが安心して自分の思いを伝え合うためには、「学級経営の充実」「児童生徒の実態把握」が大切です。普段の関わりを大切に、教師も子どもたちと一緒に考え、本音で語り合う授業を意識しましょう。

PBL の手法を生かした授業改善

「子どもたちは学ぶ意欲と学ぶ力をもった有能な学び手」であり、子どもたちに生涯にわたって学び続ける資質・能力をはぐくむためには、教科等の授業が子どもたちにとって「わくわくする学び」でなければなりません。「わくわくする学び」とは、子どもたちが、学ぶ意義を感じ、自ら課題を解決する学びと考えることができるのではないのでしょうか。その学びを実現するためには、「わくわくする学びの場（授業）」が必要です。次の PBL（Project-Based-Learning：課題解決型の学習）の手法を生かした授業改善の視点に沿って授業を見直してみましょう。

ここでは、中丹プロジェクト 21 小学校理科授業力向上プロジェクト、中学校授業力向上プロジェクトの実践を参考に、特に大切にしたい視点について紹介します。

〈授業づくりを見直す 5 つの視点〉

- 視点1** 単元で育成を目指す資質・能力と評価規準を明確にし、**単元全体の構想**を持って指導を行っているか。
- 視点2** 子どもが学ぶ意義や解決する必要性を感じる **課題の設定**をしているか。
- 視点3** 子どもたちの学びが、PBLのプロセスを生かした課題を解決する **学習過程**となっているか。
- 視点4** 子どもと教師で単元のゴールの姿を共有し、子どもが成長を実感できる **振り返り**の場面を設定しているか。
- 視点5** ファシリテーターとしての **教師の役割**を担っているか。

●単元（題材）全体を見渡す（単元構想シートの活用）

単元構想で大切にしたいことは、単元の学習を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかということです。指導案や板書計画を作成する前に、単元構想シートに書き込むことで、単元で育成を目指す資質・能力を常に意識しながら授業づくりを進めることができます。

単元構想シート作成の流れ

- 1 単元の目標を設定する** …児童生徒の実態と学習指導要領の指導事項とを照らし合わせて、単元の目標（単元で育成を目指す資質・能力）を明確にしましょう。
- 2 単元のゴールを設定する** …単元の目標をもとに、単元のゴール（単元目標を達成した子どもの姿）を明確にしましょう。
- 3 単元の評価規準を設定する** …単元の目標をもとに、単元の評価規準を設定しましょう。
- 4 単元の学習課題を考える** …どんな学習課題を設定すれば単元目標を達成した子どもの姿（単元のゴール）になるのかを想像しながら、学習課題を設定し、評価指標を作成しましょう。
- 5 単元の流れを考える** …単元の学習課題と単元のゴール（単元目標を達成した子どもの姿）を意識して、1時間1時間の授業をどのように組み立てるのかを考えましょう。

●課題を解決した具体的な子どもの姿をイメージする（評価指標の作成）

右のような単元構想シートの作成ができれば、単元目標や評価規準と照らし合わせながら、課題を解決した具体的な子どもの姿をイメージして、評価指標を作成します。評価指標を作成すると、課題を解決するために必要な力が明確になり、その力を付けるために1時間1時間をどのように組み立てるのかという単元構想を練り直すことにもつながります。

	評価指標	事例
A	・効率のよい方法を考えることに加えて、うまく特定できなかった場合のことも想定して、計画を立てている。 ・3～4つの手順を組み合わせて、実験の計画を作成している。 ・安全に特定する手順を選択している。	まず、リトマス紙を使って、5つの水溶液を3つに仲間分けすると判別しやすくなります。酸性は塩酸と炭酸水、中性は食塩水、アルカリ性は石灰水とアンモニア水に分けられます。この時点で、食塩水は特定できます。 次に、酸性の2つのうち、見た目を確かめて、泡が出ているものを見つけたら炭酸水で、残りが塩酸だと分かります。もし、炭酸水の泡が見えない場合には、2つにアルミニウムを入れます。泡を出して溶ける方が塩酸、そうでない方は炭酸水だと分かります。 最後に、アルカリ性の2つのおいを確認めると、においがあったものがアンモニア水で、残りが石灰水だと分かります。
B	・5つ以内の手順を組み合わせて、実験の計画を立てている。 ・安全に特定する手順を選択している。	まず、リトマス紙を使うと、酸性、中性、アルカリ性に分けられて、食塩水が分かります。次に、見た目を確かめて、泡が出ているものを見つけたら炭酸水が分かります。次に、においを確かめると、においがあったものがアンモニア水だと分かります。 最後に、蒸発させると蒸発皿に残ったものが石灰水だと分かり、残りが塩酸だと分かります。
C	〈手立て〉 これまで行った実験がそれぞれ何を調べるものだったのかを記録から振り返らせるとともに、それぞれの水溶液の特徴を確かめ、自分の考えを整理してまとめさせる。	

～単元構想シートを活用して、育成を目指す資質・能力を意識する～

●単元構想シート
(例) 小学校

視点1 単元全体の構想

単元構想シート様式
ご活用ください。



理科 第6学年 水よう液の性質

【単元の目標（単元で育成を目指す資質・能力）】

〈知識及び技能〉

・実験機器を適切に使い、水溶液には個体や気体が溶けているものがあることを調べたり、リトマス紙を使って水溶液を酸性、中性、アルカリ性に分類したりすることを通して、水溶液の性質を理解できるようにする。

〈思考力、判断力、表現力等〉

・水溶液の性質や働きの違いについて、複数の実験結果をもとに考察の根拠を検討したり、様々な実験を通して多面的に追究したりしながら、より妥当な考えをつくりだし、表現することができるようにする。

〈学びに向かう力、人間性等〉

・水溶液の性質に関心を持ち、主体的に問題解決しようとしたり、日常生活で利用される水溶液の性質や働きへ関心を広げたりすることができるようにする。

【単元のゴール（単元目標を達成した子どもの姿）】

水溶液の性質や働きの違いについて理解し、より妥当な考えにより説明するとともに、日常生活と関連づけて主体的に考えようとしている。

【単元の学習課題】（パフォーマンス課題）

あなたは、〇〇小学校の理科の実験助手として働いています。ある日、理科準備室の整理を頼まれ、薬品だなを整理していると、ラベルがはがれていて中身が何か分らない5つの水よう液が出てきました。あなたは、自分でその水よう液が何かを調べてラベルをはることにしました。理科室にあるものを使い、安全に5つの水よう液を特定する実験を考え、その実験の計画書をフローチャートで作成しましょう。

※ 5つの水よう液は、【塩酸】【炭酸水】【食塩水】【石灰水】【アンモニア水】のうちのどれかです。
※ 安全に5つの水よう液を調べる計画を考えましょう。
※ なるべく少ない手順で、5つの水よう液を調べる計画を立てましょう。

視点2 課題の設定

【単元の評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○水溶液には、酸性、アルカリ性及び中性のものがあることを理解している。 ○水溶液には、気体が溶けているものがあることを理解している。 ○水溶液には、金属を変化させるものがあることを理解している。	○水溶液の性質や働きについて追究する中で、溶けているものによる性質や働きの違いについて、より妥当な考えをつくりだし、表現している。	○水溶液の性質についての事物・現象に進んで関わり、粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとしているとともに、学んだことを学習や生活に生かそうとしている。

視点3 学習過程

【単元の流れ】（全11時間）

一次	二次	三次
【第1時】 ○無色透明の水溶液の見た目やにおいを調べ、水溶液中に溶けているものや、特徴の探究への意欲を高める。 【第2時】 ○炭酸水に溶けている物について予想を立て、検証するための実験の計画を立てる。 【第3時】 ○水溶液には、気体が溶けているものがあることについて表現する。また、探究の過程を振り返る。 【第4時】 ○二酸化炭素が水に溶ける性質を視覚的、感覚的に捉え、図や言葉で表現して説明する。	【第5時】 ○水溶液には、酸性、アルカリ性及び中性のものがあることを捉える。 【第6時】 ○水に溶けているものに注目して、水溶液の違いを多面的に調べて、考えを作り出して表現する。	【第7時】 ○塩酸に金属を入れると金属はどうなるのか予想を立て実験の計画を立てる。 【第8時】 ○塩酸に入れた鉄やアルミニウムの反応について気付いたことを記録する。 【第9時】 ○水溶液に溶かした金属を取り出して調べ、元の金属とは違う別のものに変化したことについて、考察する。 【第10時】 ○水溶液には、金属を別のものに変化させるものがあることを知る。 【第11時】 ○単元で身に付いた力を振り返り、課題解決を図る。

課題の提示

情報収集

仮説構築

仮説構築

アウトプット

情報収集

検証

情報収集

アウトプット

視点4 振り返り

1時間1時間の振り返り・学習前後の振り返り

課題の解決

●単元構想シート (例) 中学校

視点1 単元全体の構想

授業づくりで大切にすることは、校種や教科等が違って共通するところがたくさんあります。どうすれば、子どもたちの学びが探究的になるのか考えながら授業づくりを進めましょう。



国語科 第3学年 読むこと

文章を批判的に読もう 「人工知能との未来」／「人間と人工知能と創造性」

【単元の目標(単元で育成を目指す資質・能力)】

〈知識及び技能〉

・情報の信頼性の確かめ方を理解し使うことができる。

〈思考力、判断力、表現力等〉

・文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。

・文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価することができる。

〈学びに向かう力、人間性等〉

・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。

【単元のゴール(単元目標を達成した子どもの姿)】

文章を批判的に読み、文章の構成や論理の展開、表現の仕方等について評価することを通して、説得力のある文章について、自分の考えを持つことができる。

【単元の学習課題】

論説文を批判的に読み、どうすればより分かりやすく共感を得やすくなるかを考え、根拠を示して自分の意見をまとめよう。

【単元の評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○情報の信頼性の確かめ方を理解し使っている。	○「読むこと」において、文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えている。 ○「読むこと」において、文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価している。	○積極的に2つの文章を批判的に読み、学習課題に沿って自分の考えを文章にまとめようとしている。

視点2 課題の設定

視点3 学習過程

【単元の流れ】(全4時間)

一次	二次	三次
【第1時】 ○2つの文章を読んで、共通するテーマを捉える。 ○2つの文章を比較しながら読み、どちらの方が共感できたかを考える。 情報収集 ○学習課題を共有する。 課題の提示 【学習課題】 論説文を批判的に読み、どうすればより分かりやすく共感を得やすくなるかを考え、根拠を示して自分の意見をまとめよう。	【第2時】 ○2つの文章について、筆者の主張と論の展開を読み取り、表にまとめる。 課題分析・情報収集 【第3時】 ○観点に沿って2つの文章を整理し、共感できた点とできなかった点を挙げ、自分の考えをまとめる。 仮説構築・検証 ○どちらか1つの文章を選び、同じ文章を選んだ人同士で話し合い、自分の考えを再整理する。 アウトプット	【第4時】 ○共感できた点やできなかった点を挙げ、より分かりやすく共感を得やすくするためにどうすればよいかについて考え、根拠を示して自分の意見をまとめる。 課題分析・情報収集 仮説構築・検証・アウトプット 課題の解決 ○単元で身に付いた力を振り返る。

視点4 振り返り

1時間1時間の振り返り・学習前後の振り返り

●自分の問題解決の過程を振り返って次の学習につなげる

視点4 振り返り

単元全体の問題解決の筋道を俯瞰的に見ることで、子どもたちが見通しを持って主体的に学習に取り組むとともに、学習活動が進んでいく中で、それまでの問題解決を振り返ることができるようにします。

単元全体の学習を一枚のポートフォリオにまとめることにより、学習前から学習中、学習後の自分の考えや振り返りをいつでも見返すことができるようにし、自分自身の学びや変容を適切に振り返ることができます。

ポートフォリオ形式の振り返りシートの工夫

学習前後の変容

学習前の知識や自分自身の問題設定を記録し、単元全体の学習後の振り返りをいつでも見返すことができますようにします。

単元のゴールの共有

この単元の学習で身に付けた力として、具体的な姿や単元のゴールを示し、この学習を通して何ができるようになるべきかを明確にします。

一次ごとの学習のまとまりでの振り返り

第一次、第二次、第三次をステップ1、ステップ2、ステップ3とし、問題解決を振り返ることができるようにします。

参考:

樺山敏郎「個別最適な学び・協働的な学びを実現する『学びの文脈』」2022 明治図書

※中丹教育局では、子どもたちが単元全体の見通しを持ち、主体的に学習に取り組めるツールとして、「学習ガイド(ポートフォリオ形式の振り返りシート)」を作成しています。詳しくは中丹教育局のホームページ、または、右の二次元コードからご活用ください。



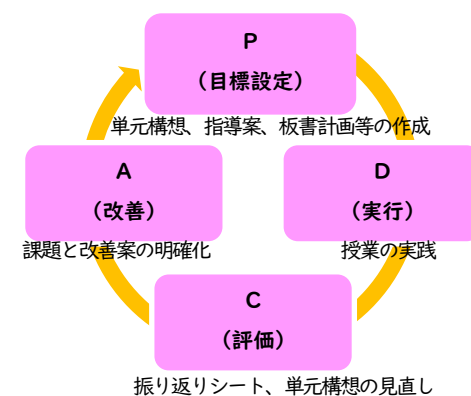
学習ガイド様式

●これからの教師の役割を意識して授業改善に取り組む

めまぐるしく変化する社会において、これからの教師には子どもたちが自身が主体的に学べるような単元構想や授業づくりの力が求められています。日々の授業を実践していく中で、身に付けさせたい力を育成することができるかどうか、教師自身が振り返りながら授業改善を進める必要があります。また、授業における教師の役割、関わり方について、子どもたちの学びが深まる授業の進め方を工夫し、興味や関心、主体性を大切にすることで、深い学びにつなげます。授業における教師の役割について、今一度見直してみましょう。

授業改善のPDCAサイクルを回す

実践した授業について検証することは、子どもたちの学びを深めることはもちろん、教師としての授業力向上につながる重要なステップです。授業中の子どもたちの行動観察や振り返りから、思考の筋道を振り返ったり、主体的・対話的で深い学びを実現する単元構想であったかを見返したりすることで、今後の改善点を明らかにし、日々の授業改善へとつなげていくことが大切です。学び続ける教師としても、大切にしたい視点です。



視点5 教師の役割

授業のファシリテーターとしての役割を果たす

教師は、授業においてファシリテーターの役割を果たすことが、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(令和3年1月答申)」の中で求められています。教師がすぐに知識や解決策を提示するのではなく、子どもたちが互いの意見や考えを受け止めながら、対話を通して深い学びをつくり上げていくことが重要です。子どもたちの主体性を引き出し、子どもたち同士のやりとりを通じた協働的な学びを促進しましょう。

指導と評価の一体化を図り、育成すべき資質・能力をはぐくむ

学習評価とは

学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するもの。「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、**教師が指導の改善を図る（授業改善）とともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにする（学習改善）**ことが大切です。

指導と評価の一体化を図るとは

指導 ↔ 評価

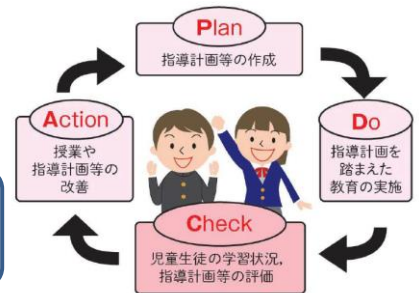
学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することです。

目標<P> 身に付けさせたい資質・能力、目指す児童生徒像を明らかにする。

指導<D> 目標達成に向け、児童生徒の実態に応じた指導の工夫や支援を行う。

評価<C> 具体的な児童生徒の姿から目標が達成されたどうかを明らかにする。

<A> 「努力を要する状況」への指導の改善を図る。



※ 学習評価の在り方ハンドブック（文部科学省）

1時間の授業の中で、「目標」「めあて」「振り返り」「評価」に一貫性がありますか

小学校3年算数「あまりのあるわり算」 ※ 学習指導案ハンドブック（京都府総合教育センター）

<本時の目標>

日常生活の場面に応じて、余りを切り上げて答えを求めることを、図や式や言葉を用いて説明することができる。

<学習問題>

35人の子どもが、長いす1きやくに4人ずつすわっていきます。みんながすわるには、長いすが何きやくいりますか。

<めあて>

「みんながすわるには、あまりをどうすればよいのか考えよう。」

学習のめあては、**児童生徒が主体的に学ぶために**、本時の目標を達成するための学習課題を児童生徒向けの言葉で提示します。

<学習の振り返り>

今日の学習を通して分かったことや、友達の考えに納得できたところ等を「あまり」という言葉を使って書く。

<本時の評価>

「おおむね満足できる」と判断される状況

余りを切り上げて答えを求めることを、図や式や言葉を用いて説明している。【思考・判断・表現】

「十分満足できる」と判断される状況

余りを切り上げて答えを求めることを、**図と式と言葉を関連づけて**説明している。

単元全体の指導計画に基づいた1時間の目標と評価の設定となっていますか。

授業づくりでは、子どもの思考の流れに沿った展開が大切です。
また、子どもの反応を具体的に予測し、個への支援や指導の手立てについて事前に考えておくことが大切です。

「より深く」や「より詳しく」といった抽象的な表現は避け、「おおむね満足できる」と判断される状況に**何が加われば、質的な高まりや深まりが見られる状況なのかを具体的に想定して記述**します。
また、授業の中に「十分に満足できる」と判断される状況が生まれる指導や手立ても必要です。

資質・能力の育成

学力向上につながる取組～学校訪問等を通して～

① 調査結果の分析を授業改善に生かすシステムの構築

調査結果は子どもの声であり、授業に対する評価
授業改善の視点が明確になるチャンス

② 教師一人一人が

自分事となる校内研修、授業研究会の実施

調査結果の分析（成果や課題）を職員で共有する。

→ 成果や課題から授業改善の視点や取組を焦点化する。

→ 授業で意識することが明確になる。

→ 授業が変わる、取組に価値が生まれる。

全教職員で組織的に取り組む

→ 学力向上につながる。

さらに好循環のサイクルを回す

③ 授業改善の視点は単元構想と課題解決型の学習

◆ 単元構想で大切にしていること

- ・ 学習指導要領の指導事項を踏まえた目標の設定
- ・ 指導と評価の一体化を意識した単元構想
- ・ 評価規準の具体化（ABCの具体的なイメージ）
- ・ 各学力層を意識した1時間1時間の課題や手立て

◆ 課題解決型の学習で大切にしていること

- ・ 課題の設定、提示の仕方の工夫
- ・ 課題の練り合い（子どもがやってみたいと思う課題の検討）
- ・ 見通しの共有（子どもと）

課題解決型の学習に取り組ませるには、子どもが課題解決に使える知識・技能を着実に習得していることが大切です。

④ 中学校ブロックにおける小中の接続

校種や担当が変わっても子どもが戸惑わないための接続

小中9年間で育成したい資質・能力を踏まえた接続

（教育課程、児童生徒の実態（学力面・生活面）、人間関係等）

調査結果の分析を授業改善に生かすシステム



学校訪問等を通して、成果を挙げている学校の取組にはいくつかの共通点が見られました。
キーワードは「**システムの構築**」、「**校内研修・授業研究会**」、「**授業改善**」、「**小中の接続**」の4点です。

自校の学力向上の取組を振り返り、見直しや改善を図るヒントにしてください。

Name